

インドネシア童話集『クスモの花』に表れた太平洋戦争期の少国民養成理念：南洋の童話から学ぶ「模範的な日本人」になる

朴，祉侯
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

<https://doi.org/10.15017/7234641>

出版情報：地球社会統合科学. 31 (1), pp.10-21, 2024-09-15. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：© 2024 PARK JIHU



論文

インドネシア童話集『クスモの花』に表れた太平洋戦争期の少国民養成理念 — 南洋の童話から学ぶ「模範的な日本人」になる —

Indonesian Folktales 'The Flower of Kusumo' and the Formation of Young Nationals during the Pacific War Period
— Learning to Become a 'Model Japanese' from Folktales of the South Seas —

2024年4月30日提出, 2024年7月4日受理

朴 祉 侯
PARK JIHU

キーワード: 南洋文学、比較文学、大東亜共栄圏、少国民、クスモの花

1. はじめに

『クスモの花』(増進堂、1942)はインドネシアの伝説を日本語に翻案した童話集で、児童文学者である小出正吾(1897~1990)によって1942年12月に刊行された。『クスモの花』の最大の特徴は、インドネシアの説話を日本の児童に読ませるために企画されたということである。こうした理由で、『クスモの花』は、1940年代の「南洋」という地理と日本の「少国民¹」がどのように結び付けられていたかを把握する上で、非常に重要なテキストだと言える。

一方、『クスモの花』は児童文学の形をとりながらも、帝国日本が唱えた「大東亜共栄圏」のイデオロギーの色彩が強かったため、プロパガンダ文学の領域にも含まれる。こうした特徴は、「この地方の人々が、どんなに日本人に似てゐるか、それは、個々に集めた話のいくつかを読んで見ただけでもおわかりになります²」という『クスモの花』の「序文」から確認できる。したがって、『クスモの花』は南洋を扱っているという点で南洋文学であり、また児童を対象にしているから児童文学でもあるが、「大東亜共栄圏」の理念を少国民に発信しているプロパガンダ文学とも言えるのである。

このように『クスモの花』は一つのテキストに南洋と日本の少国民、そして「大東亜共栄圏」という三つのコンテクストが複雑に絡まれている物語である。にもかかわらず、『クスモの花』に関する先行研究は児童文学や社会学、そして日本文学においても全く行われなかった³。

ただ、韓国で発表された一編の論文が確認されるが、この先行研究によると、『クスモの花』は「収録作品の分析から見れば、大東亜共栄圏に迎合する傾向はなく、

特に政治的に解釈されるような場面も目立たず、むしろ純粹童話的な色彩が顕著なので、結果的に出版目的を達成できなかった⁴」作品集だという。要するに、作家が「序文」でその執筆意図を明確にしているにもかかわらず、プロパガンダ的な性格を見つけれなかったということである。

ここで、『クスモの花』が米国、ドイツなどの書物を参考とし、インドネシアの物語を脚色した「翻案集」だという事実に注目する必要がある。翻案集であるため、原作との比較を通じて、『クスモの花』の執筆意図及びその意味はより明瞭になるからである。こうした点で、クォン・ヒョクレの研究は翻案集という特性を考慮せずに、翻案の結果(テキスト)だけを分析したため、『クスモの花』に対する全体的な考察には至らなかったと言える。このような先行研究の限界は『クスモの花』を「翻案書」という特徴から再検討すべき必要性を喚起させる。

以上に基づき、本稿では『クスモの花』とこの本の原作を比較分析することで、テキストの執筆意味と翻案の目的、ひいては、この本が対象にしている少国民に何を語り、また何を発信しているのかを究明する。注目すべきは、異文化であるインドネシアの物語がいかに「日本の少国民」のための教育童話となりえたか、ということである。

2. 「大東亜共栄圏」の言説と作家小出正吾の活動

日中戦争(1937~1945)の開始と同時に日本政府は「国民精神総動員運動」を実施した。「国民精神総動員運動」は、内閣の支援のもとで各級教育機関と宗教機関を中心に、大規模な宣伝活動を推進するものであった⁵。「国民精

神総動員運動」の下で出版された新聞・書籍などには敵対国の思想や文化に対する批判とともに、日本精神の発現と日本固有の文化への愛着などが強調されている⁶。

「国民精神総動員運動」の要旨は物的資源においても経済力においても劣勢な状況を克服するために、「日本の力の源泉」を見出して宣伝することであった。この「日本の力の源泉」は西洋と異なる日本文化の優秀性を発見する方向に進み、日本国民に日本特有の精神・思想・文化への関心を増幅させた⁷。

こうしたなか、戦況が徐々に不利になると、神道・神話・歴史などの人文学の知識が戦争の資源として認識され、真の日本精神を示す倫理・道徳・風俗・物語などが大衆に広く宣伝された。その時期の戦争が以前のものと違うのは、戦争の形態が近代国民戦争（国民対国民の戦争）の様相であったということと、国家の動員可能な軍事、経済、政治、思想、文化などすべての資源が戦争に使われた「総力戦」だということである⁸。こうした時代背景を足場にして、小出正吾の作品世界に変化が生じるようになった。

小出正吾は日本の児童文学者でありキリスト教的ヒューマニズム作家でもある⁹。彼は『聖フランシスコと小さき兄弟』（フランシスコ会、1922）の出版を皮切りに、1930年代末までキリスト教の童話を書いてきた。しかし、太平洋戦争の勃発（1941）以降、彼はキリスト教的作品をほぼ書かなくなった¹⁰。例えば、1930年代に彼の創造した作品のテーマは信仰心や近隣への愛などキリスト教の教理に当てはまるものだったが、1941年から1944年の間に発表した作品のテーマは南洋、船、旅行などに変わっている¹¹。このような主題変化は彼の対外活動と密接な関係にある。

1941年12月23日、ほぼ全てだといってもよいほど、当時の日本児童文学作家たちは「日本少国民文化協会」の創立総会に参加し、情報局の講堂で「少国民教育綱領」の発会式を行った¹²。この時、小出正吾は「日本少国民文化協会」の指導部長として選出され、兵士の慰問活動に従事したり南方占領地の日本語教科書編集作業に参加したりするなど、積極的に日本軍部の政策に関与した¹³。こういう時代状況のなかで『クスモの花』が刊行されたのである。『クスモの花』が出版されるや否や文部省の推薦図書として選ばれたという史実は、この図書が日本政府の統治理念をよく反映していたことを傍証する。

ところで、『クスモの花』の「序文」には『クスモの花』に収録された作品の原作に関する書誌事項を明らかにしている。

- i. F. H. Lee (1930) . Fold Tales of All Nations. New York: Tudor Publ. Co.

- ii. T. J. Bezemer (1904) . Volksdichtung aus Indonesian: Tierhabeln und Marchen. Haag: M. Nijhoff
iii. Annie Ker (1910) . Papuan Fairy Tales. London: Macmillan & Co.
iv. 松村武雄 (1928) 『神話伝説体系：第18巻インドネシア神話伝説集』 東京：近代社。
v. 齋藤正雄 (1941) 『南海群島の神話と伝説』 東京：宝曇舎。

英語、ドイツ語、日本語の書籍を参考にしていることがわかる。より詳しく分類すれば、神話学者である『神話伝説体系：第18巻インドネシア神話伝説集』から八編、また『南海群島の神話と伝説』から六編、『Papuan Fairy Tales』から五編、そして残りの一編は『Volksdichtung aus Indonesian』から翻訳した。つまり、国内外で採録した七、八十編以上のインドネシア物語から二十編を選定し、童話風に改作したのが『クスモの花』である。

『クスモの花』は「序文」で執筆目的を明確にしており、また軍部の徹底した企画のなかで刊行されたものであるため、この事実を念頭に置き、テキストを分析しなければならない。

3. 神道思想と東洋的なもの

『クスモの花』に収録された二十編の物語のなか、神や妖精が登場するのは十編、分類によっては十一、二編で、作品集の半分以上を占めている。また、神や妖精に関する物語が目次の前半に収録されていることから、妖精のように霊的な存在を素材とした物語が優先的に選ばれたと思われる。言い換えれば、小出が霊的な物語を好んでいたとも言えるだろう。

作品集で最初に紹介されたのは、「プロモの祭り」である。「プロモの祭り」は、ヒンズー教の「梵天神」^{ブラフマー}の奇跡とクスモ夫婦の信仰心に関する物語である。以下はそのあらすじである。

東ジャワ、プロモ山に住んでいる信仰心の厚いクスモ老夫婦は幸せに暮らしていたが、子供がいなかったため、梵天に子どもを願う祈りを毎日のように続けてきた。しかし、願いは叶わず二人は失望したが、神をうらむことがなかった。彼らはこう考えた。

「何かも梵天のおこころなのだ」

ある日、梵天が送った使者が夫婦を訪れた。使者は二人に子供を授けるという梵天の言葉を伝えた。数日後、使者の言った通り、夫婦は子供を産むことになった。それから時間がずいぶんたち、子供が健康に成長していたある日、梵天は夫婦に子供をプロモ山の供え物として捧げるように命じた。最初に夫婦は神様の決定に反論した。しかし、すぐに考えを改め、次のように言う。

「何ごとも梵天の御ころのままに―」

夫婦が子供と一緒に自分たちも供え物として捧げたいと神に告げると、神は彼らの信仰心を確認して幸福を与えたという。

以上のストーリーで注目すべきは、この物語の参考となった原作との違いである。黒丸(●)は『クスモの花』、白丸(○)は斎藤正雄の『南海群島の神話と伝説』の一箇所である。

①「私らには、もう子どもの望みはないのだよ。」

クスモの夫婦はかういつて、さびしくため息をつきました。けれども神様をおうらみ申すやうなことは、けつしていたしませんでした。

「何もかも梵天のおころなのだ。」

かう考えて、二人は働いてゐるのでした¹⁴。

①彼等はブローモ山のダサル(砂海)近くの家に住み、幸福に裕福に暮らしてゐた然し一つ不幸は子供の無いことであつた。クスモ夫婦は既に長年の間梵天に子が授かる様に願を罩めたが、その效顯が無いので最早諦めかけてゐる¹⁵。

②「え、では梵天は、せつかくくださつた子供をば、またお取りあげになるのでございますか。」

クスモ夫婦は驚きのあまり、思はず天人を見上げますと、天人の眼には美しい慈悲の光が輝いてゐました。

「何ごとも梵天の御ころのままに―」

年寄り夫婦はかういつて、白髪頭を地面にすりつけ、そろつておじぎをいたしました¹⁶。

②「二人の正直者よ、明日は新月である、その夜お前達は伴を伴れてブローモ山の噴火口に登らねばならぬ、天帝はお前達の伴を望みだ。天帝の意にそむいて此犠牲を惜む勿れ」
「梵天の御意に従ひませう」と悲しい声で老夫婦は云つた、そして額を地面に擦りつけた¹⁷。

引用文の比較からわかるように、「ブローモの祭り」には、原作にない「何もかも梵天のおころなのだ」「何ごとも梵天の御ころのままに―」という文章の繰り返しを追加されている。文脈上、これは無理のない翻案であるが、文学作品で「繰り返し」という叙述方式は強調を意味する場合が多いので、注意を要する。

作者が加筆した「何ごとも梵天の御ころのままに―」という文章は「神道」という日本の思想から派生した翻訳と思われる。ここでの神道とは「かんながら随神の道」(＝神様の御

心のままに)という意味で、近代日本の社会で広く通用されていた概念であり、用語である¹⁸。それでは、「随神の道」が社会的に流行するようになった経緯は何だろうか。

東京帝国大学の教授である寛克彦(1872~1961)は明治天皇の死後、『古神道大義』を書き、大正天皇の皇后からの信頼を得るようになり、ついには皇太子裕仁の家庭教師として講義することになる¹⁹。このときの講義の内容が単行本の形で内務省から刊行されるが、この本の題目が「随神の道」であった。そして、この講義の影響を受け、昭和天皇の詔勅にも「随神の道」という言葉が使われ始めた。

その後、1935年になると、「国体明徴運動」という民族主義運動の展開とともに「随神の道」は徐々に大衆に知られるようになった。しかし、この時期までの「随神の道」は一つの思想に過ぎなかった。この「随神の道」が国民的な流行になり、その使用の汎用性が拡張されたのは日中戦争(1937)以降である²⁰。

以上の歴史的検討を踏まえ、『クスモの花』の「ブローモの祭り」を読み直してみよう。

「随神の道」の意味を含有している「何ごとも梵天の御ころのままに―」という台詞により、「ブローモの祭り」の「梵天」は「天照大御神」や「天皇」と互換できる存在になる。このように「梵天」を「天照大御神」と想定すれば、この物語の主題は皇室や天皇に対する信徒(＝国民)の絶対的な服従になると言える。そうすれば、「ブローモの祭り」は日本の少国民にインドネシアの伝説を通じて日本的な精神、つまり「神道」の概念を教えるために翻案された物語だと判断できるだろう。そして、「ブローモの祭り」のあらすじから分かるように、小出が考えた「神道」の概念とは、「神」または「神の献身として信じられた天皇」に疑心の感情を抱かないこと、すなわち、神または天皇に対する無条件的な服従と忠誠であった。

天皇への服従と忠誠を扱っている物語は「ブローモの祭り」の以降にも続いている。その代表的な例が『クスモの花』と「子どもの海」である。

『クスモの花』は幸福の花(＝クスモの花)を折ってはならないという神の禁忌を破り、花を折ってしまった人間が神の怒りを買う物語である。一方、「子どもの海」は主人公「ケルト」神に捧げる供物をこっそりと食べてしまい、天罰を受けてトカゲに変えられたという話である。いずれにせよ、神様の言う通り従わなかったため、不運な結末を迎えたという教訓が語られている。整理すれば、神様の言う通り従えば「ブローモの祭り」の夫婦のように幸福を得ることができるが、神様に逆らえば天罰を免れないという、神または天皇への忠誠心を強調しているのである。

天皇への忠誠心と服従は、『クスモの花』の前半に集中的に収録されるほど、小出にとって最も重要な概念・倫理・教訓であった。問題は、小出が「梵天」のような「神道」的な存在を語りながらも、「神道」的な要素を非常に原始的な物語、すなわちアニミズム的な神話だと指摘している点である。例えば、『クスモの花』の「あとがき」で小出は「この話はいかにも南方らしい極く原始的な妖精の物語²¹」だと評価しており、「子どもの海」についても「回教の影響があると同時に、やつぱり原始的な妖精の世界²²」だと述べている。そのみならず、「黄金米」と「漁師トウイの物語」のように神道の色彩が強い作品の「あとがき」でも「原始的アニミズム」あるいは「野蛮な物語」という説明を付けている。

当時の動向で考えれば、日本の神道は神聖なものであるため、これを原始性や野蛮性などで修飾するのは不敬な言辞のように感じられる。それにもかかわらず、小出は敢えて神道と原始性を結び付けているのである。神聖な神道と浅薄な野蛮性を併記している矛盾はどのように理解すればよいのか。一つの解釈の可能性は「海の太鼓」という物語から見出される。

「海の太鼓」は『クスモの花』の収録作品のなかでも特に興味深い物語だと思う。原作に比べて最も多くの改変が見られるからである。まず、原作では主人公の盲の婆さんは息子と一緒に暮らしている家族として登場するが、「海の太鼓」では盲の婆さんは侍女に変わっている。

この物語は盲の婆さんと婆さんを雇った主人の家の女（＝女将さん）との葛藤から始まる。

合理的な性格の女将さんは普段からよく遅刻する婆さんに対して不満を抱えていた。一方、婆さんは幼い頃から盲人であったため、今まで海を見たことがなかった。そのため、婆さんは女将さんの所へ行く途中で聞いた海辺の波の音を子供の頃に聞いた太鼓の音と勘違いした。それで、婆さんは勘違いした太鼓の音に夢中になって踊ってしまったため、よく遅刻するようになったのである。

こうした顛末を知らない女将さんは彼女の息子に婆さんの尾行をさせ、ようやく遅刻の理由がわかる。元々お婆さんが気に入らなかった女将さんは、お婆さんが波の音に合わせて踊っていたことを暴露し、思い切り彼女を嘲る。婆さんはいままで聞いていた太鼓の音が波の音であったということを知り、恥じと侮蔑感のあまり、その場で倒れて死んでしまった。

ここで、婆さんに真実を教える（＝啓蒙する）女将さんは西洋、盲目の婆さんは原始的な純粋さを保持している「南方民族」に置き換えることができる。こうした置換可能性を念頭に置き、原作と「海の太鼓」の一場面を対比してみよう。

“How loud is thy drum, O dame, seeing it is beaten by a thousand waves!” And she and her child laughed loudly at the blind woman. She heard the taunt and the cruel laughter, and grew cold with shame, and fell to the earth, and her spirit left her²³.

「お婆さん、海の太鼓は、よつぽどいい音がすると見えるね。あは、は、は、は…」「あ、は、は、は…」
おかみさんと子どもとは、いつしよになつて笑ひ合ひました。

めくらの婆さんはそれを聞くと、あんまりびつくり仰天したので、かはいさうに、ばつたり地面へ倒されて、そのままになつてしまひました。

かうしてめくらのお婆さんは、めくらだつたおかげに
楽しい目にもあひ、またそのために、悲しい終わりを
とげることにもなつてしまつたのでした²⁴。

下線の文章は原作になく、小出が加筆したものである。小出の「あとがき」を参考すれば、この加筆された文章の意味がいっそう明確になる。

盲目のお婆さんが波の音を太鼓と聞きちがへて踊り狂ふところなど原住民の気持ちがよく表はれてゐるではありませんか。しかし、それが間ちがひであつたと知つた時、お婆さんの喜びも、一生も、同時に終りとなつたのでした。盲目が不幸か、目明きが幸福か――この話には、なかなか笑へない問題があります²⁵。

「盲目」と「目明き」とは単純に身体上の違いだけではない。ここでの「目明き」は西洋思想によって啓蒙された東南アジアの民族を象徴するレトリックとして読み取ることができるからである。大事なものは、小出が西洋によって文明化（＝目明き）された東南アジアを幸福ではないと言っていることである。しかも、「文明化は不幸である」というような考え方を持つ者は、小出だけではなかったのである。

自然のなかにいた南洋民族こそ幸福だつたと思う²⁶。

当時のイギリスとフランスは、「腹黒いが見え透いた文化の仮面をかぶつて東南アジアの侵略に首を突つ込んだ時、はだかで生活、何の心配もなく素朴であつた島民へ服のやうなものを教へた。それは、確かに、文化的なやうだつたが、その結果は、自分たちが作つてきた服を売り、文化の奴隷にすることにすぎなかつた²⁷。

以上は南方民族学者の伊東憲と、「南方徴用作家」としてインドネシアを体験した武田麟太郎の文章である。引用文のなかで、一番目立ったのは「自然のなかの南洋」「素朴な南洋」を幸福な状態ととらえる叙述である。詳しく見れば、伊東は原始的な南洋こそ幸せな状態だと主張しており、武田は西洋による文明化を批判的に叙述することで、文明以前の南洋を肯定する論理的構造を取っている。二人とも文明化を否定的なものと把握している点で、「あとがき」の小出の意見と同じ脈絡を共有していると考えられる。要するに、伊東であれ武田であれ、そして小出であれ、原始的な状況にある東南アジアを望ましい在り方、または幸福な東南アジアと認識する一方、西洋の支配下で西洋式教育を受けた東南アジアを不幸だと規定しているのである。

以上のような「文明の不幸論」を「海の太鼓」に適用すると、「海の太鼓」は、波の音に楽しげに踊っている「盲目」の婆さん（東南アジア）を強引に啓蒙させ、不幸を招いた女将（西洋）を批判する物語だと読まれる。さらに、こうした読み取りは、婆さんを盲目の状態のままにしておくことが望ましいという教訓へ繋がると思われる。つまり、『クスモの花』で繰り返し言及される原始性とは、西欧の文明が入る以前の東南アジアを肯定することで、東南アジアと西洋を完全に切り離すために、作者が工夫した文学的装置なのである。

『クスモの花』を読んだ日本の少国民が原始的な南洋を肯定するようになるのは、想像に難くない。ただし、大事なことは、西洋化された南洋の原始性を回復するには、西洋の圧政から南洋地域を独立させなければならないという「大東亜共栄圏」の口実の良い論理も、少国民たちが知らぬうちに少しずつ身につけた可能性のことである。

4. アジアの盟主日本と帝国の子供たち— 「大東亜共栄圏」と弱者の政治学

これまで、霊的な存在に関する物語が作品集の半分を占めていることを確認した。その次に多いのが寓話で、弱い動物の世界に敵が現れるか、強者を打ち払うために弱い動物たちが連帯する物語である。

寓話の動物は、特定の人、あるいは特定国家の象徴として考えられる²⁸。そのため、『クスモの花』で暗喩された動物たちもすべて西洋と日本の関係に置き換えることができる。

「猿の尻尾」の主人公である幼い鹿、カンチルは、野原にいるヤギたちが悲しそうに頭を垂れているのを見た。鹿がその理由を聞くと、ヤギたちは毎年虎に供物を捧げているが、今日がその日だと答えた。カンチルはヤギたちに、自分を王にすれば虎を退治して見せると言い、

ヤギたちはそれを承諾する。

王になったカンチルは、ゴムを体に塗ったまま草原をあちこち走り回った。すると、花や木が体に付着し、体格が大きくなった。そのあと、カンチルはヤギたちとともに虎と部下の猿のところへ向かった。

大きな鹿を目にした虎は、ヤギたちに素晴らしい王が現れたと思い込み、猿と尻尾を繋げて対抗しようとしたが、虎はカンチルの勇猛さに負け、逃げてしまった。「猿の尻尾」はこのような物語である。

注目すべきは、小さな鹿が「王」となって「弱いヤギと連帯」している点と、弱い動物たちが力を合わせて強い動物に立ち向かうという点である。

『クスモの花』には、鹿が弱い動物のリーダーとして頻繁に登場し、また猛獣に屈服することなく知恵で乗り越えるイメージでよく描かれている。インドネシアの説話を調査したところ、鹿という動物はインドネシアの説話のなかでよく登場する動物であるが、中立的な存在として表象される場合もあるし、時には悲劇的な結末を迎えるケースも少なくない。それにもかかわらず、『クスモの花』には弱者を助ける鹿の物語のみが収録されているのである。言い換えれば、インドネシアの説話に登場する様々な鹿の表象のうち、弱者を助けたり、知恵で猛獣を退治したりする鹿の話だけが選別され、翻案されたということである。鹿のイメージの意図的な選択については、より具体的な分析が必要だと考えられる。

「猿の尻尾」では小さい鹿がヤギの王になって虎を追い払った物語であったが、「小鹿と鰐」は、鹿が知恵を生かしてワニを屈服させる話である。一般的に言って、ワニは鹿より強い動物であるが、この童話のワニはいつも鹿に負ける存在として描写されている。特に、小さい鹿が川の向こう側に咲いた花を見つけ、ワニを利用して川を渡るというエピソードについて、小出は「身体的な劣勢を乗り越えて欲しいものを手に入れる姿は我が国の「因幡の白兎」と同じ種のもの²⁹」と評価する。要するに、インドネシアの物語から日本との類似性を抽出しているのである。しかも、『クスモの花』には鹿が日本の天皇のように読めるエピソードもある。

「キダン鹿とチェブルカン鳥」には、草を刈る人々によって、危険な状況に陥ったチェブルカン鳥と彼の子供たちが登場する。チェブルカン鳥は、子供たちを人間から守るために、小さい鹿に助けを求める。鹿は、チェブルカン鳥の子供たちが「自立」するまで「外部の危険」から保護してあげると言い、草を刈り取る人間を妨害する。危険から救われたチェブルカン鳥は恩返しをしようとするが、鹿はまるで「神の使い」のようにこう答える。

みんな日頃のきみたちの正直のおかげといふものだよ。きみたちの祈りがききとどけられて、天の神様が幸運をお授けになつたのだ。ほくはただその幸運のなか立ちになつただけの話さ。天の神様が生かしておかうとなさるものを、誰が殺すことができるものか。神様からめぐみを受けてゐる者は、けつして害を受けることはないものだ³⁰。

All; it is, thanks to your God. For Lord, the God of Heaven, your prayers have been heard, And the God of Heaven has bestowed good fortune on you. Cherish that good fortune, both You and I.³¹

引用はそれぞれ小出の翻案と原作から引いたものであり、下線は原作から翻案された部分を表示したものである。興味深いのは「神様が生かそうとする者は誰も殺せない」という文章である。この文章は「神様のおこころのままに」と同じ意味だといえる。先に述べたように、「神様のおこころのままに」は「随神の道」に通じているため、鹿の話した「神様が生かしておかうとなさる」の以下の文章は、人間から領土を奪われたチェブルカン鳥に神道の思想を教えている場面だと解釈できる。実際、中村明蔵によると、鹿は日本の古代神話のなかで神道を教える天の代理人としてよく描かれた³²という。これに加えて、「あとがき」からもわかるように、徳川時代の説話に関する言及や日本の昔話についての様々な見解、何より小出が1944年に少国民向けの『わが国の民話・おとぎ話』（協力出版社、1944）を出版した事実³³を考慮すると、彼がすでに「鹿」と「神」の関係を知っていた可能性が高い。

以上の論議に踏まえて、鹿が日本を表象しているのだとすれば、日本の精神である鹿から守られ、自立するチェブルカンの家族やヤギたちは、自ずと東南アジア諸国の象徴になる。何よりも、小さい鹿が弱い動物たちの側に立ち強い猛獣を追い出すというプロットと、帝国日本が東南アジアを西洋から保護するという「大東亜共栄圏」の論理が当てはまっていることは重要なポイントである。これは偶然の一致ではない。「大東亜共栄圏」を宣伝するために生産されたプロパガンダ的言説を見ると、宣伝文の論理が『クスモの花』の語っている弱者の連帯に関する論理と相当類似しているからである。

南洋民族は、即ち、私たちの親愛なる祖先の同族なのであつて、即ち自分自身の姿だ。白人の強圧より、不断の搾取と抑制より、救へという叫び声は誰の耳に入らなくとも、アジアの先進国、アジアの唯一無二文明国のわが民族の耳には入る³⁴。

引用は「南方徴用作家」としてインドネシアに派遣された浅野晃の文章である。浅野の文章の中の「白人の強圧」と「不断の奪取」は、「虎の恐怖統治」または「草を刈り取る人間」に見立てられる。そうとすれば、「救へという叫び声」をする南洋民族は、ヤギたちあるいはチェブルカン鳥になれるだろう。直接的に表現するか、暗喩と象徴で表現するか。この程度の違いがあるだけで、『クスモの花』は少国民に向けた戦意高揚の宣伝メッセージを巧みに発信しているのである。このように、当時の日本の少国民は、よく作られた童話などを通じて、「大東亜共栄圏」の思想と戦争の正当性を体得した。

ところで、鹿が日本の精神であり日本そのものであるとすれば、なぜ「弱い」「小さい」「柔弱な」などの修飾語で表現されているのか。これは、『クスモの花』の刊行時期と関連があると思われる。

『クスモの花』の刊行時期（1942）は、太平洋戦争（1941-1945）が勃発したばかりの時期であった。この時期、日本軍部は客観的に劣勢な戦争に参加せざるを得ない国民を説得し、戦意を高揚させる必要があった。この過程で作り出されたのが、まさに「弱者の政治学³⁵」であった。

「弱者の政治学」とは、日本とアジアの国々はアメリカやイギリスに一度も勝利したことのない弱者であるが、武士道精神と不屈の闘魂、そして、アジアの連帯精神さえあれば、必ず勝利できるという論理である³⁶。『クスモの花』もこうした「弱者の政治学」をそのまま標榜した。つまり、「弱者の政治学」を日本の少国民に伝えて戦争に臨む心構えを教えるために、小出は弱くても頭のいい鹿を中心に弱い動物たちが連帯し、強者を追い払う物語のみを翻案したのである。

5. 復讐の精神と武士道の発見

『クスモの花』では、武力と復讐の要素を前面に押し出す物語もかなり取り上げられている。このなかで、唯一ドイツ語から翻案された「妖精の王様」は次のようなものである。

ある男性が偶然にワオイ草を発見し、あとでゆっくり食べられるように自分のものという表示を残して去って行く。しばらくして、妖精の王様もそのワオイを見つけ、他人の所有という表示にも関わらず自分のものにす。結局、ワオイをめぐる男性と妖精の王様は決闘することになる。妖精の王より人数も武力も劣っている男性は妖精の部下に捕まるが、知恵を働かして危機を脱する。やっとの思いで生きて帰った男性は、妖精の王に復讐するために仲間をよび集め、妖精たちの住んでいる洞穴に火をつける。この火事で妖精たちは全員死ぬことになる。

以上の粗筋のなかで、注目すべきは、男性が復讐を決意し、それを実行に移すまでの展開である。小出はこの箇所を「戦争」を暗示するような口調で翻案している。

『クスモの花』の「妖精の王様」 ³⁷	原典『Volksdichtung aus Indonesian』の「König der Feen」 ³⁸
昨日のことことが忘れきれず、どうにも癪にさはつてしやうがありません。「何とかして一つ、あの妖精の王様をやつつけるくふうはあるまいか。」男はかう考へて、友だちをよび集め、わけを話して、妖精退治に出しました。	Da rief er in seinem Zorn seine Freunde zusammen und befahl ihnen, ihm mit Speeren und Fackeln zu folgen.
かうして、その夜の戦争祝ひはおいしいワオイの御馳走でした。	Der Mann forderte das Waoi-Gras zurück und teilte es freudig mit allen.
妖精のたちが、洞穴でくすべられずしまたとしたならば、今でも人間の世界にはおいしいワオイの御馳走は傳らずにしまったことでせう。 ワオイのすきな妖精の王様や、妖精の家来どもがゐなくなつたおかげで、私たちはけつかうなワオイの御馳走に舌鼓を打つことができるのです。	Wären die Feen in den Tieren noch am Leben, könnten die Menschen das Waoi-Gras nicht essen.

原作では「Da rief er in seinem Zorn seine」（彼は依然として怒っていた）程度に述べているこの場面に、小出は「あの妖精の王様をやつつけるくふうはあるまいか」という文章を付け加えて、復讐の対象を明確にしながら復讐の方法を工夫する男性の姿まで描いている。

ほかにも、ドイツ語の文献では「Mann forderte das Waoi-Gras zurück und teilte es freudig mit allen」（男性がワオイ草を取り戻し、皆で分けて食べた）となっているが、小出はこの行為を「戦争祝ひ」と表現している。また、原作の物語は「Wären die Feen in den Tieren noch am Leben, könnten die Menschen das Waoi-Gras nicht essen」（妖精たちがまだ生きていたら人間たちはワオイ草を食べることができなかったはず）という終わり方をしているが、小出は原作と同じ意味の文章を記述したあと、この文章を「妖精の王様や、妖精の家来どもがゐなくなつたおかげで」に変えた。つまり、敵を撃退して敵がいなくなったからこそ、おいしいワオイ草を手に入れることができたという「勝利の副産物」の意味を強調しながら物語を終わらせたのである。

前述したとおり、小出の翻案は「太平洋戦争」という時代状況はかなり意識して行われている。したがって、『クスモの花』の復讐譚は敵を特定し、その敵とどのように戦うべきかを少国民に教えるために翻案されたと言える。ファシズム体制下の帝国日本が東洋の土地を奪つ

たアメリカとイギリスを殲滅すべき敵とみなし、彼らを「叩き潰そう」「打ち負かそう」「引き裂こう」というフレーズで説明して大衆を扇動した³⁹ことと同じ脈絡である。

小出は「妖精の王様」の「あとがき」で、「この物語に現れてくれる野生植物の所有権争ひなどについても、人間社会の発展を知る上に面白い⁴⁰」と述べている。太平洋戦争を念頭に置いた彼の創造スタイルを考えると、この「所有権争ひ」は「植民地争奪戦」を意味すると言えるだろう。ならば、「妖精の王様」の「妖精たち」がアメリカとイギリスであり、彼らを撃退して獲得した副産物が南洋諸島という解釈も十分に可能ではないだろうか。

このように世界情勢を考慮した小出の記述方式は、「犬鷲退治」という物語で武士道精神の前景化とともにクライマックスに達する。

『クスモの花』の最後に収録されている「犬鷲退治」は、犬鷲マヌバダに殺された父の仇を取るために修行し、犬鷲との激闘のすえ勝利を収め、故郷に帰って英雄として遇されるという内容である。いかにも「桃太郎伝説」のような物語である。この物語で興味深いのは、小出が原作の内容から武士道精神を抽出するために多くの箇所を修正・加筆したことである。最も顕著な修正・加筆は、「力の鍛え」と「仇討」という言葉の意図的な繰り返しである。

“Nay, Mother,” answered the children, “but when we are bigger we shall slay him who hath slain our father.”⁴¹”

「いいえ、おかあさん、御心配はいりません。ぼくたち兄弟が大きくなつたら、きつとおとうさんのかたきを討ちます。マヌバタがどんなに恐ろしい犬鷲であらうと、負けないほどの力の鍛へでかかりますから、今から待つてみてくださいな⁴²」

引用からわかるように、原作の「自分たちが成長したら父を殺した犬鷲を殺す（Slay）」という単純な叙述を、小出は「ぼくたち兄弟が大きくなつたら、きつとおとうさんのかたきを討ちます。マヌバタがどんなに恐ろしい犬鷲であらうと、負けないほどの力の鍛へでかかりますから、今から待つてみてくださいな」という文章に修正し、復讐と鍛錬の要素を加えたのである。

When Kototabe and Kelokelo were now grown they made ready for the journey to Manubada's eyrie. They took a strong canoe, and loaded it with slings and clubs⁴³.

それからといふもの二人の兄弟は、ますます一生けんめいに力を養ひ、やがてりつばな若者になりましたので、いよいよおとうさんの仇討の時が来たと、支度に取りかかることにいたしました⁴⁴。

先の引用文と同様に、成長した二人の兄弟が犬鷲の巣へ旅立ったというだけの文章を、「一生けんめいに力を養ひ、やがてりつばな若者になりましたので、いよいよおとうさんの仇討の時が来たと、支度に取りかかることにいたしました」と書き換えた。このあと「仇討」や「鍛錬」のような用語は五回以上登場するが、いずれも原作にない加筆である。

小出は「あとがき」で「この物語にでてゐる父の仇討のための不屈の修行（中略）の気持ちなどには、何となく、武士道的なものを感じさせられてはありませんか⁴⁵」と書いて、この童話集を締めくくった。自らが原典にない日本の武士道的な要素を挿入して翻訳したにもかかわらず、あたかもインドネシアの神話や伝説には日本の武士道的なものがあるかのように紹介することで、翻案の作業を終えたのである。

ただ、この時点で「仇討」が果たして武士道的なものなのかについて、手短に検討しておきたい。

新渡戸稲造が武士道を西洋に紹介するために英語で刊行した「Bushido: The Soul of Japan」(1899)を参考すると、復讐は「屠腹（＝割腹）と姉妹関係にある⁴⁶」ため、復讐を「武士道的なもの⁴⁷」として評価していることがわかる。また、先行研究でも復讐を社会的に推奨した室町時代の武士道観や、復讐を武士の当然の権利とみなした江戸時代の考え方を例に挙げ、武士道と復讐が密接な関係にあることを述べている⁴⁸。もちろん、復讐が武士道として認定されるためには条件が必要だ。上司や恩人の仇を討つときにだけ行うこと⁴⁹。つまり、自分や妻に加えられた危害は認定されなかった。「犬鷲退治」の場合は父の復讐であるため、武士道の典型的な復讐となり、したがって、この復讐も武士的なものとなる。

武士道にまつわる話は敵から被害を受けた時、徹底的に復讐することを認めている。こうした点から見れば、「犬鷲退治」はアメリカやイギリスによって被害を受けている親の世代のために、少国民は力を鍛えて武士道精神で復讐しなければならない、という教訓を少国民たちに教えている物語なのである。

6. 経済的実感としての教訓

『クスモの花』には両国間のつながりを強調するために、日本とインドネシアとの類似性を言及する文章が随所に見つけられる。例えば、先で分析した「小鹿と鰐」では、

「因幡の白兎」との類似性を抽出し、日本とインドネシアの親近感形成を図っている。これは、昔から日本と東南アジアが血縁関係であったことを浮き彫りにし、南洋が日本の植民地になることを正当化しようとした作業の一環だと考えられる。しかし、血縁関係を主張した意図の根底には、血縁だからこそ、人的・物的資源の犠牲を要求しても良いという植民地主義的思想が横たわっている。

太平洋戦争時期、帝国日本に必要な資源はゴムやボーキサイトなどの天然資源であった。そして、これらの資源は東南アジア地域でしか獲得できなかった。したがって、帝国日本が南洋地域を必死に占領しようとしたのは、南洋を西洋から独立させるためではなく、こうした南洋の資源を日本のものにするためであった。

太平洋戦争を資源戦争と表現する⁵⁰。これは、帝国日本が太平洋戦争を思想やイデオロギーで包装したが、実相は南洋で得られる経済的・資源的利益を狙って起こした戦争だからである。実際、太平洋戦争期、日本の知識人が持っていた南洋への眼差しを詳しく見てみると、イデオロギー的な理念の領域よりも経済的実感の次元で南洋を語っている場合がもっと頻繁であった。以下の三つの引用はその代表的な例である。

又、南洋には、共栄圏の上に絶対的に必要な物質、即ち、ゴム、石油、鉄、ボーキサイト、砂糖、木材、米、綿花、硬質繊維等々が豊かにある。この経済的生命線も、確保しなければならない⁵¹。

南洋は資源の劣勢を克服する上に、南洋の海上制覇の確保は、言うまでもなく、我が国の、第一の条件である。
(中略) 南洋は私たちの経済的に最後の砦である⁵²。

인도네시아는 어느 섬이든 비옥한 토지가 많고, 작물에도 안정맞춤이다. 만약 이것들을 의 토지를 개척하고 재배한다면 보다 많은 산물을 낼 수 있을 것이다. (중략) 남양은 일본의 남방교통, 어업지로서 점점 발전할 것이다⁵³.

このような資源への関心は『クスモの花』にも表れている。例えば、二十編の物語のうち十二編が米や農作物を題材にしており、ゴムやサトウキビ、トウモロコシやボーキサイトなど、具体的な資源の名称が作品の所々に書かれている。一見、物語の中でほんの少し言及されるだけの素材のように見える。しかし、日本の小国民が日本語に翻訳されたインドネシアの物語を読みながら「南洋にはどんな資源があるのか」を自然に学習した可能性についても見逃してはならないだろう。

7. 結論

本稿では、『クスモの花』に収録された物語を比較文学的に分析し、南洋という概念と「大東亜共栄圏」の思想がどのように日本の少国民に発信されているのかを考察した。『クスモの花』を通じて少国民に発信された内容は、「日本の神道思想と日本的な精神」「弱者の論理とアジアのリーダー日本」「武士道精神の発見」「南洋の資源」に分類することができる。これらの内容は、将来の模範的な日本国民になるために必要な精神であった。したがって、日本の少国民たちは『クスモの花』を読んで、南洋をどう理解すべきか、また、南洋をいかに学習すべきかを学ぶと同時に、「模範的な日本国民になる方法」も身につけたのであろう。

重要なのは、『クスモの花』が日本の物語ではなく、インドネシアの物語だということである。言い換えれば、優れた日本人になるために必要な資質と精神がインドネシアの物語から発見されているのである。これについては、二つの解釈ができると考えられる。一つは、作者が南洋を理解することで日本も理解されるという二重の学習効果を狙ったということである。そして、もう一つは、日本とインドネシアが同じ価値観や思想を共有している共同体だということである。もちろん、この共同体が「大東亜共栄圏」を意味することは言うまでもない。

最後に、『クスモの花』をめぐる幾つかの問題について説明し、論文を結びたい。

『クスモの花』は1942年に企画された『大東亜童話叢書』の第一巻に過ぎない。『大東亜童話叢書』は全六巻で、インドネシアの『クスモの花』、中国の説話を翻案した『孔子さまと琴の音』、マレーシアの物語を扱っている『カド爺さんの話』、フィリピンの『椰子の実と子供』、印度の童話集『白い象の野原』、そしてベトナムの『安南の水鶏』で構成されている。いずれも、当該地域の専門家が英語・フランス語・ドイツ語・オランダ語・ロシア語・中国語などの原作から翻訳したものである。

問題は、これらの翻案が、1970年代、朴正熙（パク・チュンヒ）独裁政権下の韓国に受容され、当時の政権が唱えた「維新憲法」の理念に沿って韓国語に翻訳されたということである。つまり、南洋の神話と伝説に関する知識は西洋から出発し、日本で翻案され、そして韓国に影響を与えたという「翻案の輪」のなかで完成されたのである。しかし、この「翻案の輪」に神話と伝説の起原である東南アジアは含まれたことがなかった。これは、東アジアが持っている東南アジアの民族学的・文学的知識の限界を示唆しているのではないだろうか。

注

1) 日中戦争（1937）勃発を前後にして、帝国日本は本格的にファシズム政策を繰り広げた。ファシズム政策下の日本政府は国民を効率的に統治するために、三つの階層で国民を分け、それぞれの階層に「模範的な日本人になるための資質と思想」を注入した。三つの階層とは、エリート男性、銃後婦人としての女性、そして少国民である。ここで、少国民とはまだ成熟した国民ではないが、いつか日本の優れた国民になれる予備国民という意味である。少国民には模範的な日本人になるための価値と理念が教育された。これに関しては、大藪龍介『日本のファシズム——昭和戦争期の国家体制をめぐって』（社会評論社、2020年）を参考。

2) 小出正吾『クスモの花 東印度童話集』増進堂、1942年、2頁。

3) 『クスモの花』の研究が進まなかった理由については様々な原因が考えられる。そのうち、ここでは戦後の日本近代文学会の「研究雰囲気」ということを指摘しておきたい。

大東亜戦争期、数多くの作家や文学作品は戦争イデオロギーの文化的な提供者・伝播者の役割をした。しかし、日本の敗戦後、「戦争の残酷さと無慈悲さ」に気づき、反省する雰囲気が一般市民の間で広がっていった。したがって、戦争に利用された文学作品を望ましくない文学として分類し、読書も出版もタブー視する社会的雰囲気が生産されたのである。このような過程を経て、戦後、日本近代文学の研究も、直接的に戦争に関わった作品や作家の研究を控えるようになった。

こうしたなか、戦後の日本近代文学会は、戦争という暗鬱な時代のなかで、戦争からはずれていた作家と戦争に批判的な態度を堅持した作家の作品を発掘し、そうした作家や作品だけを集中的に研究し始めた。日本文学の反戦意識を発見するという意図の一環であった。例えば、井伏鱒二や金子光晴などの作家が日本文学史の中で反戦の作家として重要な位置を占めるようになったのも、こういう戦後の文学研究の雰囲気とかかわっている。

日本文学の反戦意識に取り組む研究は、戦争に対する日本文学者の批判意識を確認し、抵抗文学の体系を立てるという面でそれなりの意義を持つ。だが、戦争やイデオロギーに直接に加担した文学を徹底的に無視したため、なぜ日本の文学者が戦争に賛美したのか、日本の文学者がイデオロギー文学を作り出した時、いかなる文学的想像力を使ったのか、そして、そうした作品が当時の日本人にどのような景況を与えたのかなど、文学研究史における大きな空白を残してしまった。

もちろん、1990年中盤、いわばポストコロニアリ

ズム批評の景況を受けた幾つかの研究者によって、日本文学の戦争責任とイデオロギーがある程度明らかになったのも事実である。しかし、この作業はおおむね有名な作家の戦争言説を検討したにすぎない。

以上の研究の流れからすれば、「大東亜共栄圏」という戦争イデオロギーを全面的に扱っている『クスモの花』が研究の対象として論議の外にあったのも、容易に推察できる。また、小出正吾は日本文学史のなかで大して重要な位置を占めている作家ではない。つまり、あまりにも有名ではない作家だったので、現在に至るまで、本格的な研究対象として取り上げられたことがなかったのではないだろうか。戦後の日本近代文学の研究傾向について詳しい説明は、鈴木貞美『現代日本文学の思想—解体と再編のストラテジー』（平凡社新書、2005年）参考。

- 4) 권혁래 (クォン・ヒョクレ) 「태평양전쟁의 문화적 부산물 『구스모의 꽃: 동인도동화집』 (1942) 의 내용과 성격」『東南亞研究』 30 (3), 한국외국어대학교 동남아연구소, 2021년, p.183.
- 5) 南博『日本人論(上)——明治から今日まで』岩波文庫、2006年、204-274頁。
- 6) 同上、272頁。
- 7) 森松俊夫「総動員体制の起源と特徴の再検討——戦争人類学の探求」『比較社会学』 22 (2)、2010年、452頁。
- 8) 南博前掲書、251頁。
- 9) 土屋忍「植民地をめぐる文学的表象の可能性：小出正吾・森三千代・西川満をめぐる」『アジア遊学』 (167)、2013年8月、186頁。
- 10) 同上、187頁。
- 11) 권혁래 (クォン・ヒョクレ) 前掲書、189頁。
- 12) 浅岡靖央「戦争政策としての少国民文化——少国民文化政策と日本少国民文化協会」『子どもの文化』 40 (8)、2010年、72-78頁。
- 13) 권혁래 (クォン・ヒョクレ) 前掲書、190頁。
- 14) 小出正吾前掲書、4頁。*下線は引用者による
- 15) 齋藤正雄『南海群島の神話と伝説』宝雲舎、1941年、177頁。*傍線筆者任意
- 16) 小出正吾前掲書、10頁。*下線は引用者による
- 17) 齋藤正雄前掲書、178頁。*下線は引用者による
- 18) 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社新書、2005年、199頁。
- 19) 同上、190-195頁。
- 20) 同上、194-217頁。
- 21) 小出正吾前掲書、282頁。
- 22) 小出正吾前掲書、283頁。
- 23) Ker. Annie, "Papuan Fairy Tales", Macmillan&Co. 1910, p.20.
*<http://archive.org/details/papuanfairytale00kera/mode/2up>.
- 24) 小出正吾前掲書、235-236頁。*下線は引用者による
- 25) 同上、294-295。*下線は引用者による
- 26) 伊東憲『南洋の民族と文化』大空社、1941年、110頁。
- 27) 武田麟太郎『ジャワ更紗』筑摩書房、1943年、341頁。
- 28) 고영훈 (コ・ヨンフン) 「인도네시아 민담에 나타난 동물 상징」『외국문학연구』 (43), 한국외국어대학교 외국문학연구소, 2005, p.11.
- 29) 小出正吾前掲書、292頁。
- 30) 小出正吾前掲書、115頁。
- 31) Ker. Annie (ibid), pp.71-71
- 32) 中村明蔵「近代における日本神話の再生とその歴史的背景」『地域総合研究』 26 (2)、1999年、78頁。
- 33) 土屋忍前掲書、189頁。
- 34) 浅野晃「我が国からジャワへの「3A」運動」『東京朝日新聞』 1943年7月13日。
- 35) 권명아 (クォン・ミョンア) 『역사적 과시증: 제국의 판타지와 젠더 정치』, 책세상, 2005, pp.185-186.
- 36) 同上、pp.188.
- 37) 小出正吾前掲書、264-266頁。*傍点は引用者による
- 38) T. J. Bezemer (1904). Volksdichtung aus Indonesian: Tierhabeln und Marchen. Haag: M. Nijhoff, p.312.
<http://archive.org/details/Volksdichtung00Bezegoog/page/n439/mode/2up>. *翻訳にあたり、九州大学大学院・地球社会統合科学府の修士課程(交換留学生)カタリナ・グレーナー氏の助力を受けた。
- 39) 권명아 (クォン・ミョンア) 前掲書、145-146頁。
- 40) 小出正吾前掲書、296頁。*下線は引用者による
- 41) Ker. Annie (ibid), p.61. *下線は引用者による
- 42) 小出正吾前掲書、269頁。*下線は引用者による
- 43) Ker. Annie (ibid), p.61. *下線は引用者による
- 44) 小出正吾前掲書、270頁。*下線は引用者による
- 45) 同上、296-297頁。
- 46) 新渡戸稲造, "Bushido: The Soul of Japan", Kodansha International, 2002, pp.146-147. *初出はフィラデルフィア文庫で1899年に刊行された。
- 47) 同上、148頁。
- 48) 船津明生「明治期の武士道についての一考察」『言葉と文化』 4、名古屋大学、2003年、257頁。
- 49) 新渡戸稲造前掲書、161頁。
- 50) 後藤乾一『近代日本と東南アジア——南進の「衝撃」と「遺産」』岩波書店、1995年、181-186頁。

- 51) 井東憲前掲書、130頁。
 52) 「時代評論」『東京毎日新聞』1943年12月9日
 53) 井上雅二著・정병호 (チョン・ビョンホ) 訳『남양 : 남양의 일반 개념과 우리의 각오』, 보고사, 2023年, pp.52-53. *下は井上雅二『南洋』(南洋協会、1942)より。
 [原文] インドネシアはどの島でも肥沃な土地が多く、作物にもってこいです。もしこれらの土地を開拓してから、栽培すれば、より多くの産物を出すことができるでしょう。(中略) 南洋は日本の南方交通の、漁業地としてますます発展するでしょう。

参考文献

<分析テキスト>

- 小出正吾 (1942) 『クスモの花 東印度童話集』(第1巻) 増進堂.

<日本語文献>

- 浅岡靖央 (2010) 「戦争政策としての少国民文化—少国民文化政策と日本少国民文化協会」『子どもの文化』40 (8) : 70-81.
 浅野晃 (1943) 「我が国からジャワへの「3A」運動」『東京朝日新聞』(7月13日付).
 伊東憲 (1941) 『南洋の民族と文化』大空社.
 後藤乾一 (1995) 『近代日本と東南アジア——南進の「衝撃」と「遺産」』岩波書店.
 小出正吾 (1922) 『聖フランシスコと小さき兄弟』フランシスコ会.
 小出正吾 (1944) 『わが国の民話・おとぎ話』協力出版社.
 大藪龍介 (2020) 『日本のファシズム——昭和戦争期の国家体制をめぐる』社会評論社.
 齋藤正雄 (1941) 『南海群島の神話と伝説』宝雲舎.
 鈴木貞美 (2005) 『現代日本文学の思想—解体と再編のストラテジー』平凡社新書.
 鈴木貞美 (2005) 『日本の文化ナショナリズム』平凡社新書.
 武田麟太郎 (1943) 『ジャワ更紗』筑摩書房.
 土屋忍 (2013) 「植民地をめぐる文学的表象の可能性 : 小出正吾・森三千代・西川満をめぐる」『アジア遊学』167 (8月) : 166-186.
 中村明蔵 (1999) 「近代における日本神話の再生とその歴史的背景」『地域総合研究』26 (2) : 75-99.
 波瀲剛 外 (2023) 『近代アジアの文学と翻訳 : 西洋受容・植民地・日本』勉誠社.
 松村武雄 (1928) 『神話伝説体系 : 第18巻インドネシア神話伝説集』近代社.

- 南博 (2006) 『日本人論 (上) ——明治から今日まで』岩波文庫.

- 森松俊夫 (2010) 「総動員体制の起源と特徴の再検討——戦争人類学の探求」『比較社会学』22 (2) : 438-459.
 船津明生 (2003) 「明治期の武士道についての一考察」『言葉と文化』4 : 254-268頁.

<英語またはドイツ語文献>

- Annie Ker. (1910) Papuan Fairy Tale. Macmillan&Co.
 F. H. Lee. (1930) . Fold Tales of All Nations. New York: Tudor Publ. Co.
 INAZO, N. (2002) . Bushido: The Soul of Japan. Kodansha International.
 T. J. Bezemer. (1904) . Volksdichtung aus Indonesian: Tierhabeln und Marchen. Haag: M. Nijhoff.

<韓国語文献>

- 권명아 (2005) . “역사적 파시즘 : 제국의 판타지와 젠더 정치”, 책세상.
 권혁래 (2021) . “태평양전쟁의 문화적 부산물 『구스모의 꽃: 동인도동화집』 (1942) 의 내용과 성격”, 『東南亞研究』30 (3) : 174-189.
 고영훈 (2001) . “인도네시아 민담에 나타난 동물 상징”, 『외국문학연구』(43) : 8-21.
 정병호 역 (2023) . “남양: 남양의 일반 개념과 우리의 각오”, 보고사.

Indonesian Folktales ‘The Flower of Kusumo’ and the Formation of Young Nationals
during the Pacific War Period
— Learning to Become a ‘Model Japanese’ from Folktales of the South Seas —

PARK JIHU

Abstract

This study conducts a comparative literary analysis of the Indonesian folktale collection “The Flower of Kusumo” (1942) to elucidate how the ideology of the “Greater East Asia Co-Prosperity Sphere” during the Pacific War was being imparted to Japan’s young nationals (children). “The Flower of Kusumo,” an anthology published by children’s story writer Shogo Koide, comprises 20 stories selected from Indonesian legends and myths adapted from originals in English, German, and Japanese. These stories have been markedly Japanese in their adaptation, reflecting Shinto ideas, the spirit of Japan, solidarity among the weak, Japan as the leader of Asia, and the discovery of the samurai spirit. Japanese children, reading these Indonesian stories in Japanese, would have not only learned what is Japanese but also realized that the two nations belong to the same community. In this context, given that this community is defined as the “Greater East Asia Co-Prosperity Sphere,” “The Flower of Kusumo” can be described as a book that disseminated the South Seas, the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere, and the Pacific War to Japanese children in the form of fairy tales.

Keywords

Nanyo literature, comparative literature, Greater East Asia Co-Prosperity Sphere,
young nationals, Flower of Kusumo